

Jane Austenの描いた18世紀後半の イギリスの結婚の風景

— *Pride and Prejudice* をめぐって —

熊谷 由里子

A Study on Jane Austen's *Pride and Prejudice* : Love and Marriage in Austen's World

KUMAGAI Yuriko

1 はじめに

ジェーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) は、18世紀後半、イギリスに次々と女性作家が現れた時代に生まれ小説を書き始めた作家であるが、19世紀の作家と分類されることが多い。華やかな歴史を舞台とするゴシック・ロマンスが大流行していた当時において、大げさな感傷的な表現を排し、ひたすら一見平凡と思われる日常に関心を向け、恋愛や結婚というテーマを一貫して書きながらも、その巧みな人物造形と心理描写により後の世代に多大な影響を与えた作家である。海の向こうでは、フランス革命やアメリカ独立戦争が行われていた時代に成長したオースティンではあるが¹、作品では激動の時代のことには直接触れず、イギリスの地方紳士階級の三、四家族にしぼって書き、しかも女性が主人公となるパターンを常にとる。その主人公をめぐる人々との人間関係を冷静な観察眼から詳細に描き、それゆえに、永遠に変わらない人間性を捉えることに成功したと言える。さらに、オースティンの描く結婚の描写にはこの時代の身分制や経済の様子が色濃く詰められていることも見逃せない。

結婚はオースティンの小説世界のメインテーマであり、本論では『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) でオースティンが描いた18世紀後半のイギリスの結婚の風景を分析し、その作品を通してオースティンが表したことについて考察する。まず第二章において、作家の生い立ちと、その生きた時代の中でイギリス社会は女性にどのようなことを要請し、

その価値観や許容範囲の中で女性達はどのように生きたのか考察する。その後、第三章において、『自負と偏見』で描かれた愛と結婚の風景について考察する。主人公エリザベスが見た親友シャーロットの結婚と自身の結婚の二つを取り上げ、二つがどう描かれているか分析する。最後に、18世紀後半のイギリス社会の結婚の描写を通してオースティンが炙り出したことは何かということを考察する。

オースティンは、結婚をこの時代の女性にとっての唯一と言えるほどの大きな人生の選択肢と捉えており、女性が人生を切り開く上でのターニングポイントと考えていた。しかしその際に重要なことは、「自分や他人を冷静に観察する目」や「人としての正しさ優しさ」つまり人としての生き方であり、その縁組みを成功に導くため、さらに人生を良く生きるために女性ができることをも小説で表現していた。家と家の結婚といった時代に、個人と個人の繋がりによる結婚について描いたオースティンは、当時の社会が持っていた女性観に留まらない思考や行動をも登場人物の女性達にさせており、直接女性の権利について描写してはなくても、19世紀に徐々に高まっていった女性の権利の拡大を目指す時代に先駆けていたと結論づける。

2 作家の誕生とオースティンの生きたイギリス社会

2.1 オースティンの生い立ちと作家の誕生

ジェーン・オースティンは、1775年12月にイギリス、ハンプシャーのステイベントン(Steventon)という村で生まれた。父ジョージは牧師であり、母カサンドラも又、牧師の娘であった。英国国教会の牧師の仕事は、社会的に高く評価されていた上に、オースティン家の場合は、紳士階級から貴族階級にまでまたがる親類縁者もいたイギリス上層階級の家庭であった。しかし、六男二女の下から二番目に生まれたジェーンであり、裕福な暮らしをしていたとは言えない状況であった。ただ、活発な大勢の兄弟の他に、生涯変わらぬ愛と信頼を抱き続けた姉カサンドラがいたし、牧師の父の元で教育を受けていた男子生徒たちも家を出入りしていたため、オースティン家はにぎやかであった。さらに、近隣の家族との交流もかなりあり華やかな社交生活があった。

当時、ようやく居間に登場していた小説も読める環境であり、一家をあげて読書好きであったことも特筆すべきことと思われる。読書好きな父が調えた書棚には500冊もの本があったと言われており、その中から自由に本を取り出して読めたオースティンは、この時代の女性としてたいへん例外的な状況にあった。小さな村ではあったが、ここで過ごした25才までの時期に、小品、劇などを書いて、家族の者たちを笑わせていたことが実姉カサンドラへの手紙から分かっている。

表立って女性が書くことは認められていなかった時代に、家事や社交の合間に小さな紙切れに少しずつ書き付けていたオースティンは、20才前にはすでに現存する三作品『自負と

偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)、『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811)、『ノーサンガー・アビー』(*Northanger Abbey*, 1818) の初稿を完成させていた。ジェーンが書くことは家族に受け入れられていたし、父に至っては作品を高く評価し出版しようと奔走していた。それでも実際に出版されたのは『分別と多感』が 1811 年、『自負と偏見』は 1813 年であり、20 才の頃の作品を 30 代後半となったオースティンが手を加え出版したという状況であった。『ノーサンガー・アビー』に至っては亡くなった後の 1818 年によく出版された。初めに出版された『分別と多感』はたいへん好評を博し、出版エージェントが刷った分は完売したという逸話も残っている。時のシャーロット王女が誉めたとの話も残っているほどであるが、名前を隠していたオースティンは世間に知られることはなかった。

同時代に生きたフェミニストの祖であるメアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-1797) とは違った生き方をしたオースティンであり、当時の社会規範の要請する女性らしい生き方で生涯を生きた女性だったが、基本的には社会規範に従いながらも、書ける機会が訪れる毎に作品を作っていたバイタリティあふれる女性でもあった。ジェーンから 100 年ほど後に現れる女性作家バージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) が『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929) で「女性が小説を書こうと思ったらお金と自分の部屋が必要だ」と嘆く様子を見ても²、オースティンが家族の承認の元にあったとは言っても、とりわけ楽な状況で執筆したとは思われず、女性が書くことを奨励されなかった時代に、これだけの作品を書いたオースティンは明らかに時代に先駆けた女性であった。

作家の誕生を暖かく見守った家族、特に一家の長であった理解ある父の存在は大きかったが、オースティンも自分らしさを大切にして生きた女性であり、その姿は後に続く女性達に計り知れない影響を与えた。

2. 2 18 世紀後半のイギリス社会

次に、オースティンの生きた時代のイギリス社会に目を向けていきたい。結婚にまつわる話ばかり書く、と評されることの多いオースティンではあるが、その結婚話には当時の社会の価値観が濃厚に織り込まれている。18 世紀後半から 19 世紀初めのイギリス社会はどのような歴史の流れの中にあったのか、その中で生きる人々の価値観はどのようなものであり、さらに女性の生き方はどのようなものであったのか考察することで、より一層オースティンの描いた世界に迫ることができるため、概観する。

18 世紀後半の世界と言え、激動の時代であった。1776 年はアメリカ独立戦争、1789 年にはフランス革命が起こっており、価値観の大変換期にイギリスも無関心ではいられなかった。イギリスの知的ならびに文化的競争相手は依然としてフランスであり、1805 年にはトラファルガーでフランスとスペインの連合艦隊を破ってはいるが、ナポレオンが侵攻するのではという恐怖を当時のイギリスは持っていた。

経済面では唯一の競争相手であったオランダを追い抜いており、イギリスはこの頃には

ヨーロッパ経済体制の中心となっていた。当時のロンドンには、様々な活動の拠点となっており、活気付いていた。コーヒーハウスや酒場も多く、カード等の賭博や観劇も盛んであった。しかし、一般には職を得ることは簡単ではなく、物乞いや煙突掃除夫、徒弟といった状況に甘んじる他には選択肢がなく、新天地アメリカへの渡航も多かった。女性に関しては言うまでもなく、職業を持ち、身を立てることは至難の業であった。

18世紀のイギリスの発展は目覚ましいものがあるが、教育という観点からはたいへん厳しい状況であった。オックスフォード大学やケンブリッジ大学はあったが、一部の特権階級にのみ開かれていたものであり、日曜学校や慈善学校で英国国教会の教えと多少の読み書き、算術が教えられたが、女子には算術の代わりに裁縫が教えられたという。18世紀のイギリスでは女性には教育ではなく「たしなみ」が重要であると考えられていた。若い女性は縫い物、編み物、糸紡ぎを教わっており、特にレース編みが重要であったという。レース編みに至っては読み書きと同等と考えられていたし、料理、少々のフランス語イタリア語、音楽がたしなみとされていた。それでも近世の女性の日常生活を研究したハル (Suzanne W. Hull) によると、書くことに比べて読むことを学ぶことは易しく、家庭ですら学習できたため、16世紀から17世紀において既にイギリスの女性には相当読む力があつたという。このことから18世紀のイギリスにおいては、女性であっても読むことは当然できており、読むことに比べれば比率は低くはあつたが、書くこともできる社会状況へと少しずつでも変化していたと考えていいと思われる。

社会規範としては、18世紀後半では「gentlewomanは仕事をするものではない」「女性がお金を稼ぐのははしたない」とされていた。生活に比較的余裕のある市民階級の妻たちが社会に生まれてきており、生き甲斐を模索していたところへ、子供を大切に「献身と自己犠牲の母」という概念が広まって行き、19世紀には社会規範となつていったという状況があつた。しかし、女性の権利はいまだ少なく、この頃の女性が子供に対する権力を手に入れたとも言える。メアリ・ウルストンクラフト『女性の権利の擁護』(1792)によると18世紀後半のイギリスでは、女性は「美しく、男性に隷従する」ことだけを要求される存在で、女性に施される教育もそのように女性を作り上げ、男性に依存する他には選択肢がないという社会規範であつたようだ。結婚した女性は、基本的に、財産や子供、離婚について無権利状態であつたが、そういった状況に疑問を持つことすら許されなかつたとさえ言える。

イギリスでは、歴史的に、政治権力と社会的地位は土地所有に依存してきていた。この時代になると、ブルジョワ階級が勢力を拡大してきていて、地主階級との接近が起っており、例えば商人の娘が多額の持参金を持って地主社会に流れ込んだりしており、新陳代謝の盛んな開かれた社会が展開されつつあつた。しかし、昔ながらの、領地や財産を守る上流階級では、まだ結婚は家と家との取り決め、といった風習が残っており、社会の変革は徐々に進行していたと見た方が良さそうである。

3 『自負と偏見』 (*Pride and Prejudice*, 1813) に描かれる結婚の風景について

3. 1 ヒロインエリザベス (Elizabeth) から見た結婚

この小説のヒロインはエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) という二十才の女性である。ベネット家の家長であるエリザベスの父は年に二千ポンドの収入のある、上流の中でも下の層に入る家庭である。ロンドンと行き来のできる範囲にあるロンボーン (Longbourn) という架空の田舎町に住んでいることになっている。この家庭には五人姉妹がおり、当時の制度では誰も父の財産を譲り受けることはできないため、将来を考えて身の落ち着く先を考えなければいけない状況に舞台が設定されている。五人姉妹のうちの上から二番目としてエリザベスは登場する。上の姉、ジェーンが人目を引く美人、エリザベスは器量では姉より劣るという設定である。その代わり、エリザベスには知性が与えられており、快活でものを考えられる女性、自分の意見に従って行動することのできる女性として描かれている。当時の社会状況を見た際に、社会が要請していたのは女らしさ、従順さ、美しさといった価値観であり、エリザベスは、大方はその時代の女性らしさに沿っているが、場合によっては通常の基準を超した言動もする、時代の先を行く女性である。

さて、このベネット家の二女エリザベスには、近くに住む仲良しのシャーロット・ルーカス (Charlotte Lucas) という親友がいる。ここでは、このシャーロットの結婚を見るエリザベスの視線を追ってみたい。

20 才のエリザベスに対し、27 才のシャーロットであったが、思慮に富む聡明な女性としてエリザベスが尊敬していることがうかがえる描写が度々ある。舞踏会でダーシー (Mr. Darcy) に 'tolerable' (13) と評されたエリザベスは、ダーシーに強く反発を覚えるのだが、シャーロットに次のように論され反発の気持ちはありながらも、シャーロットの説明に一理を見ることもあった。

“His pride,” said Miss Lucas, “does not offend *me* so much as pride often does, because there is an excuse for it. One cannot wonder that so very fine a young man, with family, fortune, everything in his favour, should think highly of himself. If I may so express it, he has a *right* to be proud.” (21)

それがこともあろうに、ベネット家にやってきてエリザベスに求婚し、断られるや否や、シャーロットに結婚の申し込みをすることのできる人物コリンズ (Mr. Collins) とシャーロットが結婚するという。コリンズは、ロンボーンにやって来て間もなく、ベネット家の財産を限定相続する償いに五人の娘のうちの一を妻にもらうつもりでいると公言し、美しさも申し分ない長女ジェーン (Jane) を年の順からも妥当と決める。しかし、ジェーンにはもう相手が見込まれていると知って、次に申し分のないエリザベスへと簡単に替えて求婚し

てしまう。エリザベスはもちろん承諾などできず断るが、二日も経たないうちに脈がありそうと見たシャーロットに求婚し、しかもそれをシャーロットが受けたというのだから、エリザベスには衝撃であった。シャーロットは、驚くエリザベスに次のように言う。

“ …You must be surprised, very much surprised, — so lately as Mr. Collins was wishing to marry you. But when you have had time to think it over, I hope you will be satisfied with what I have done. I am not romantic, you know; I never was. I ask only a comfortable home; and considering Mr. Collins’s character, connection, and situation in life, I am convinced that my chance of happiness with him is as fair as most people can boast on entering the marriage state.” (123)

これだけの事情の中で、厚顔で愚かなコリンズの求婚を承諾するのは、シャーロットが結婚を便宜的なものとしニカルに見ているから、と言えるのではないだろうか。エリザベスはシャーロットの結婚の承諾に同情すべき点があるとは認めているようだが、やはり結婚を利害関係とみているシャーロットに驚いている。シャーロットは人が変わった訳ではなく、自分の結婚について冷静に判断していることが次の発言から見て取れる。

“ …My dear Jane, Mr. Collins is a conceited, pompous, narrow-minded, silly man; you know he is, as well as I do; and you must feel, as well as I do, that the woman who married him cannot have a proper way of thinking. …” (133)

親友と思っていたシャーロットが自分とは違った結婚観を持ち、しかも自分がそれに違和感を覚えてしまうため、エリザベスは困惑する。老嬢としての自分の未来におびえ、コリンズについてよく知りながらも一緒になる道を選んだシャーロットは、自らの認識を裏切り、自分らしいふるまいを犠牲にしたと言える。エリザベスにとって、自分への正しい認識を持つこと（それは裏返せば他者への正しい認識を持つことでもあるが）、正しい考え方をして正しくふるまうことが真の人間関係に不可欠なことと考えている様子がうかがえ、この結婚の取り決めによりシャーロットとの間の友情は失われてしまったと言える。

しかし、後に、結婚したシャーロットに招かれ新婚家庭を訪問した際に、エリザベスは新婚家庭を間近で見えており、夫の声や言う事を聞かないようにして身を守る親友の姿も見ているが、その視線は温かく、シャーロットの結婚を仕方がないものと納得するエリザベスとして描かれていた。

3. 2 ヒロインエリザベスにとっての結婚—エリザベス自身とダーシーの場合

次にヒロインエリザベスにとっての結婚がどういったものとして描かれているか見てみたい。

エリザベスとダーシーは、初めの出会いにおいては、一目で互いに好意を抱いた、といったものではなかった。個性と個性が反発し合い、エリザベスに至っては、ダーシーが言った“*She is tolerable*” (13) という自分への評価を漏れ聞いてしまい、ダンスの機会が訪れた時にも意固地とも言える程の拒否をしてしまう。その後も、快活で積極的なエリザベスは、初めに自分に対してなされた発言への反発もあり、田舎者や身分の低い人間を積極的に避けるダーシーに常に対抗してみせようという意識を持ってふるまうようになっていく。

その後ネザフィールド (Netherfield) で開かれるビングリー家の舞踏会に招かれるエリザベスであったが、エリザベスにはダーシーとの会見はつらいばかりで屈辱感すら持ってしまうといった展開となって行く。

頑なにダーシーへの偏見を持ち続けるエリザベスは、ダーシーへの捻じ曲がった気持ちをひそかに持つウィカム (Whickam) にダーシーについての嘘をつかれるとさらに偏見が積み重なって行ってしまう。実際には、ウィカムが打ち明けるダーシーのひどい仕打ちに違和感を覚えるエリザベスであったが、一見では低い階級の人間を見下すように見えるダーシーに次のようにすっかりレッテルを貼ってしまう。

“I had not thought Mr. Darcy so bad as this—though I have never liked him. I had not thought so very ill of him. I had supposed him to be despising his fellow-creatures in general, but did not suspect him of descending to such malicious revenge, such injustice, such inhumanity as this.” (79)

自分の頭でよくものを考える女性であるはずのエリザベスであるが、ここではこの発言にもある通り、ウィカムの言い立てるダーシー像にどこか違和感を覚えながらも同意してしまう。ウィカムが人当たりのいい態度であったため、無愛想なダーシーを一瞬で悪い人柄と決めつけたように、ウィカムのこともさわやかな人だと決めてしまったエリザベスであった。

しばらく接触がなかったエリザベスとダーシーだったが、新婚のシャーロットを訪ねていた時に、土地の名士であるロージズ邸 (Rosings Park) に招待されたエリザベスは、その家の親戚に当たるダーシーと偶然再会する。二人はこれまで様々なことがあったにも関わらず、エリザベスは次のように語り、楽しいやり取りをする。

“You mean to frighten me, Mr. Darcy, by coming in all this state to hear me? I will not be alarmed though your sister *does* play so well. There is a stubbornness about me that never can bear to be frightened at the will of others. My courage always rises at every attempt to intimidate me.” (170)

エリザベスに会う度に観察し、その知性や言動、優しい気持ちに徐々に惹かれていたダー

シーは、この再会をチャンスと捉え、プロポーズする。プロポーズは次のような言葉で行われた。

“In vain I have struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must allow me to tell you how ardently I admire and love you.” (185)

しかし、数々の悪い噂を鵜呑みにしていたエリザベスは、ダーシーのプロポーズを激しく拒否した上に、ウィカムから噂で聞いていただけの過去のふるまいまで持ち出し、ダーシーをきつく非難してしまう。

“And of your infliction,” cried Elizabeth with energy. “You have reduced him (=Whickam) to his present state of poverty — comparative poverty. You have withheld the advantages which you must know to have been designed for him. You have deprived the best years of his life of that independence which was no less his due than his desert. You have done all this! and yet you can treat the mention of his misfortune with contempt and ridicule.” (187)

エリザベスの思い切った物言いからエリザベスの誤解に気づいたダーシーは、翌日言葉を尽くした弁明の手紙をエリザベスに渡す。その手紙はエリザベスの予想も着かない内容で、それにより数々のもつれたものが解かれ、“How despicably I have acted!” (201) というつらい認識へ至り、次のような反省を強いられる。

“I, who have prided myself on my discernment! I, who have valued myself on my abilities! who have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity in useless or blameable mistrust! How humiliating is this discovery! Yet, how just a humiliation! Had I been in love, I could not have been more wretchedly blind! But vanity, not love, has been my folly. Pleased with the preference of one, and offended by the neglect of the other, on the very beginning of our acquaintance, I have courted prepossession and ignorance, and driven reason away, where either were concerned. Till this moment I never knew myself.” (201–202)

その後、つらいエリザベスにつらさの追い討ちをかけるかのように、奔放な妹リディア (Lydia) の駆け落ち事件が起こる。大変な不名誉が家族に降り掛かるのだが、その時にもエリザベスへの思いやりを持って影で助け役をしたのはダーシーであり、いよいよダーシーの正しい美しいふるまいがエリザベスに知れ、第二のプロポーズがなされる。第一のプロ

ポーズとは大きく違い、次のようなものであった。

“If you *will* thank me,” he replied, “let it be for yourself alone. That the wish of giving happiness to you might add force to the other inducements which led me on, I shall not attempt to deny. But your *family* owe me nothing. Much as I respect them, I believe I thought only of *you*.” ……” You are too generous to trifle with me. If your feelings are still what they were last April, tell me so at once. *My* affections and wishes are unchanged, but one word from you will silence me on this subject for ever.” (346)

高慢と偏見で曇っていた視点を持っていた二人の人間が「冷静に正しく考え」ようと努力し理解を深めていった先に、愛と尊敬の気持ちが生まれ、その先に結婚が必然としてあったのだった。高慢も偏見も人間が持ちうる欠点として描かれており、欠点に気づき、克服への努力をすることで真の成長を遂げることができると描かれており、エリザベスとダーシーは二人で互いの成長に手を貸し、それに伴って互いに敬意を持ち、その延長において結婚を手にしたのであった。

しかし、この時代の結婚となると、両者とも家からの圧力とも戦わなければならず、個人対個人では結婚を執り行えなかった。エリザベスにとっては、家の重荷とは、身分の違いではなく（「紳士の娘」であるから）恥知らずな母や妹たち、それに対して何もしない傍観者的な父といった家族の存在であった。たえず意識に潜入してくる家の者への恥の感覚にエリザベスは悩まされていた。一方ダーシーも、第一回目のプロポーズをした時には、あまりにも正直に、エリザベスとの身分の違いやエリザベスの家の者の持つ問題点などにためらいを覚え、それでも好きかどうか悩まされたと告白してしまっている。エリザベスの魅力に心を奪われながらも、身分の釣り合いといった社会の制約を乗り越えなければいけなかったのだ。家族制度や家族が個人の自我を束縛する時代に、二人の惹かれあう人間が、自らの「自負と偏見」と戦って正しい認識を勝ち取り、個人と個人としての結婚を決意し、最後には周囲の理解を得て、幸せな結婚を手に入れたのだった。

4 オースティンの描いた結婚の風景に込められた思い

以上第三章では、ヒロインエリザベスが近くで見た親友シャーロットの結婚と、エリザベス自身に起こった結婚の風景を、オースティンがどう描いたか分析した。シャーロットは、女性が仕事も財産も持てない時代の中で、身の置き場を結婚で作る女性として描かれていた。シャーロットと対比する位置にエリザベスは置かれ、一人の人間が一人の人間と出会い、身分や財産等に影響されずに、共に生きて行くという形での結婚をなしうることを示し

ていた。

小説全体を通して描かれるのはヒロインエリザベスとダーシーの結婚にまつわる筋であるが、この小説は結婚をテーマとし、全体で幾重にも結婚の風景を描いていることも見逃せない。その中心となるのはエリザベス、その姉ジェーン、妹たちであるが、その母であるベネット夫人が実は大きな役割を担っている。下品でたしなみも無い母をエリザベスは恥ずかしい存在と見ているが、結局母が案じ画策し娘たちは次々と結婚するわけであり、この小説全体が母から見た結婚の風景とも捉えることができる。小説の出だしの “It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.” (5) はベネット夫人の言葉と取れるのではないだろうか。オースティンは財産をあまり持たない娘がどう未来を切り拓くか、というテーマを持ってこの小説を書いており、ベネット夫人もそのテーマを担っていたと思われる。全36章から成るこの小説の最終章の出だしもやはり “Happy for all her maternal feelings was the day on which Mrs. Bennet got rid of her two most deserving daughters.” (364) とベネット夫人のことである。書いていたそもそもではオースティンはまだ20才ではあったが、自身をも含む当時の女性達が自活の道を許されていない社会でどう生きて行けるか、社会への批判の目を持っていたと思われる。その制約を受け入れる女性もいれば、抗う女性もいることを、エリザベスやその母を通してオースティンは描いていた。

オースティンを結婚ばかりテーマにする作家であると批判した人は多いが、それまでの価値体系が世界的に揺れ動きつつあった18世紀後半のイギリスで、それでもこの時に及んでも自立の道を閉ざされていた女性たちにとって、人生で唯一で最大の選択をすることのできるものが結婚であったし、その重い意味は現代の私たちからは推測すらできないほどのものであったと思われる。その重いテーマを取り上げつつも、ユーモアあふれる明るいヒロインを造形し、コメディとして小説を完成させたオースティンの力量は素晴らしく称えられるべきである。

この小説でオースティンの描いた結婚とは、「自分自身に対する正しい認識（裏返して人への正しい認識）」と「他人に対する正しい思いやり」を持って生きる個人が、信頼と尊敬によって作る平等な人間同士の真の絆の上に成り立つ、というものであった。18世紀後半のイギリス社会において、まだなかなか夢のような結婚観であったと思われるが、初恋が実らず、その後結果的に生涯独身を貫いて生きたオースティン自身の結婚に対する思いが込められていたと言えるのではないだろうか。

また、人権に対する大きな動きがアメリカやフランスであった時代背景の中で、フェミニズムの萌芽も見られたイギリスに生きたオースティンであり、直接それらに言及することがなかったからと言って、意識していなかったとは言えないはずである。女性は男性に劣るため黙って従順に従うべき、という社会規範の中で、自分の意見を持ち堂々と述べそれに従ってふるまうヒロインをオースティンは描いていた。実際の生活でエリザベスとオースティン

自身が重なるようにふるまっていた訳ではないことが伝記で分かっているが、オースティンは、エリザベスのように自分の幸せを考え、掴み、結婚を実りあるものにして生き活きと生きる女性が登場する時代の到来を期待し、小説世界に夢を託していたと思われる。

註

- 1 オースティンの伝記的背景については、キャロル・シーズ、内田能嗣／惣谷美智子監訳『ジェイン・オースティンの生涯』（世界思想社 2009 年）並びにクレア・トマリン、矢倉尚子訳『ジェイン・オースティン伝』（松岳社 1999 年）に依っている。
- 2 バージニア・ウルフは『自分だけの部屋』（*A Room of One's Own*, 1929）の中で“A woman must have money and a room of her own if she is to write fiction.”「女性が小説を書こうと思ったらお金と自分用の部屋が必要だ」という主張をしている。オースティンはその生涯でどちらも潤沢に持っていた訳ではなかった。生まれ育ったステイブントンでは比較的恵まれたが、その後転居した際には 10 年ほど書くことができない時期もあった。

参考文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. Penguin Classics, 2003.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. Mariner Books, 1989.
- 内田能嗣 塩谷清人『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』世界思想社、2007 年。
- 榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』英宝社、1984 年。
- 川崎寿彦『イギリス文学史』成美堂、1988 年。
- 川本静子『ジェイン・オースティンと娘たち』研究社、1986 年。
- キャロル・シーズ 内田能嗣 惣谷美智子監訳『ジェイン・オースティンの生涯』世界思想社、2009 年。
- クレア・トマリン 矢倉尚子訳『ジェイン・オースティン伝』松岳社、1999 年。
- 佐久間康夫／中野葉子／太田雅孝編著『概説イギリス文化史』ミネルヴァ書房、2002 年。
- 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』成美堂、1995 年。
- スーザン・ハル 佐藤清隆他訳『女は男に従うもの？ 近世イギリス女性の日常生活』刀水書房、2003 年。
- 久守和子・吉田幸子編著『イギリス女性作家の深層』ミネルヴァ書房、1985 年。
- 藤田清次『評伝ジェーン・オースティン』北星堂書店、1981 年。
- メアリ・ウルストンクラフト 白井堯子訳『女性の権利の擁護』未来社、1980 年。
- リチャード・B・シュウォーツ 玉井東助 江藤秀一訳『十八世紀 ロンドンの日常生活』研究社出版、1990 年。

（くまがい ゆりこ 本学講師）

